

# 千刈狸の呟き

## 町医者 of 嘆き

医療の崩壊、過激な時間外勤務に堪えられず逃げ出した医者、そして結果、縮小や閉院寸前の病院の現状。今ほど医療を取り巻く社会がマスコミの俎上に乗せられたことはかつてない。

そして誇らしげに、長寿世界一をマスコミに喧伝するが、そのなかには世界一を支えた医師達の努力を賞賛することはない。治療のため海外に出国した患者の法外な医療費の高さに驚きながら日本の優れた高度医療の安さには口を閉じる。そこで町医者の嘆きを書くことにした。

拙狸はあくまでも町医者であり、地域開業医と想ったことはない。あくまでも町の中の一人が仕事として医者を生業としてこれまで生きてきたつもりである。診察室での医師と患者の関係はその一部でしかない。町を歩けば誰もが会釈し、世間話をしたり近況を知らせあったり頼まれば何でも引き受けても来た。案外医師の仕事が病気の治療とばかり思っている人が多いのではないだろうか。学校医、小児検診、老人検診、予防注射、そして近隣の会社工場の産業医、警察医、祝祭日の地域当番医、などなど……深く地域に関わってこそ町医者なのだ。

我が家に伝わる安政時代の日記の中に、宅快気振舞という一行がよく目につく。家族の病気全快に快気祝いをし、医者を招いた記事である。また伊勢参りに行く挨拶に来て二か月後、無事帰宅の挨拶に来たことや、寺の行事、伊勢講や無尽講、句会などの町内グループ参加など、まさしく町医者の暮らしは患者の病状以上に町の内情を知る町民の一人であったのだった。それは今の拙狸に受け継がれている。快気振舞いによばれた記憶はないが、拙狸が診た患者さんの殆どは三代にわたる一家で、祖父母、現当主、その孫と家系もそれぞれの環境も熟知している間柄が大半である。

こうした地域の町医者の存在が薄れて来始めてきている。拙狸はこの原因は家族の核化にあると思うようになった。2世代、3世代同居が少なくなり、これまでの仕来りが伝承されなくなって、

別居した新世帯が選ぶ医者は、規模の大きさや、職員の多さを基準に病院を選ぶ目安にしてきた。どんな軽症であれ病院の混雑の中に、かかりつけ医を持たずに待合室を埋める結果となり、勤務医の過労の要因となったのではないかと邪推かもしれないが。

専門分化した現代医療では一般医を軽視しているのではないかとと思われるケースに時折遭遇する。殆どの開業医は嘗て大学で、あるいは研究室で、または専門分野の病院で十分な執務履歴をもってから開業している筈だが、このことに関して患者に伝えて安心させることは医業広告禁止にふれそうである。その上で地域開業医が中核病院と綿密に連携し、いわゆる病診一体の医療を形成することがこれからの大事な課題だと思っている。

戦後、アメリカ占領軍は医師免許は卒後1年間のインターン勤務のあと医師国家試験に合格することを条件とした。全科を体験する機会是一般医の前段として大変いい経験になった。笑えない笑い話が記憶にある。それは精神病院に行っていた時のこと、患者さんから「貴方は誰ですか」と問われ、「インターンです」と答えたら、「ワンタンは食えるけどインターンは食えないな」と真顔で言われた、この一年間のインターンは無給だったのである。

この稿を書き始めたら解散総選挙となった。この時期に選挙には全く関係のない自分だが、怒り心頭に達した新聞記事があったので書かざるを得ない。

狸の怒りは昨年11月20日読売新聞『医師 社会常識欠落している人多い』と全国知事会議での麻生首相発言である。首相として前代未聞の常識無き御本人からさらに非常識と言われたら膨れた狸の腹は納まらない。勿論セレブでハイソな生活体験のない我々町医者は彼等のいう常識には接することは出来ないけれども。

隠居狸